

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

旅する文化の研究：外国人講師として (私のスケッチ・ブック (22))

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005905

旅する文化の研究

—外国人講師として—

国立民族学博物館 助教授

森 明 子

■外国人講師から何を学ぶか

大学で外国人講師の存在は、今やめずらしいものではない。外国人講師に期待されているものは何だろう。

外国の研究者に求められるもののひとつに、比較の視点がある。比較ということについて、少し考えてみたい。

私の専門である文化人類学・民族学は、異文化を研究する分野である。そのなかで、私はヨーロッパのドイツ語地域を主たる対象としている。私の同僚は、他の文化を研究していて、異なる文化を研究する者同士の対話を通して、この分野は成り立っている。

比較の視点は、文化の研究ではつねに潜在している。ただし、多くの場合、その比較の標準軸を構成するのは、西欧の文化である。アジアやアフリカ、ラテンアメリカやオセアニアなどの諸文化は、西欧の設定する標準軸上のどこかに、位置づけがなされてきた。

このことを私の研究にあてはめると、奇妙な逆転が起こる。私の研究で、ドイツの文化は何に対して配置されるのか？ 私が参照枠とするのは日本の文化

なのか、西欧の文化なのか？

これをさらに一步進めてみると、私の研究成果をヨーロッパ人は、どのような参照枠をもって聞くのか、ということになる。

もとより、私がいくら懸命に励んだとしても、知識と情報の双方で、ドイツ人研究者と肩を並べることは到底できない。それでも、私の研究が彼らにないものを与えるとしたら、それは、私に彼らには見えないものを見つけるかもしれない、という可能性ということであろう。それが異文化に対する視角である。そのような視角は、大学という制度の中で、生かされる質のものだろうか？

■知識の伝達が議論か

：大学の授業風景

昨年、私はベルリン・フンボルト大学ヨーロッパ民族学研究所で、学生向けのゼミを担当した。当初は辞退するつもりだったのだが、結局引き受けた理由は、上に述べたような関心があったからである。授業題名を和訳すると「ヨーロッパのフィールドワークへの視角」である。

ヨーロッパ文化研究を専攻する学生は、日本人講師から何を学ぶのだろうか？

引き受けてはみたものの、学生の知識の傾向も、気質も、また授業の構成もドイツと日本では異なる。私は、夏学期に向けて、半年ほど授業風景を観察した。

まず、この研究所のカリキュラムは、ゼミ主体で構成されていて、講義はひとつしかなかった。日本の大学ではふつう講義のほうが多い。ゼミが多いことは、議論を重視する教育の全般にわたる傾向と密接にかかわっていた。

ゼミでは、議論そのものを学生が仕掛けてゆく。講義の場合、議論は講師への質問という形をとる。それに比べてゼミでは、担当学生は、内容を要約して発表し、内容の中で何を議論すべきかを一文にまとめて提示する。そこまでを授業の半分ほどの時間で終えて、残りの時間を、ゼミ参加者による議論にあてる。学生の論題の選定がつねに的を射たものとは限らないから、講師が修正を加えながら、議論の舵をとっていく。

ここで学生は、自分で考え、その考えをまとめて表現することを訓練される。これが日本の大学との最大の相違である。

日本のゼミでは、多くの場合、内容を正しく理解することに目的が設定されていて、議論まではとてもいかない。学生は発表に懸命で、しばしば詳細すぎて内容を理解できなくなるほどだ。質問は奨励されるが、実際にはほとんどない。

とくに英語文献を扱うときは、理解することもむずかしい。ここにはもちろん、外国語が不得手な日本人のハンディも影響している。ドイツの学生にとって、英



語は外国語であるとしても、日本人に比べれば、はるかに身近なものである。

もっとも、ドイツの学生がよく議論するからといって、日本の学生より多くの知識を蓄積しているとは限らない。正確に理解することをめざして、勤勉に励んでいる日本人学生がいたとすれば、その学生のほうが、より多くの知識を身につけている可能性は高い。

だが、自分の頭で考えてそれを表現するということでは、ドイツの学生のほうが長けている。ましてや、自分とは異なる見解と対決する、ということにでもなれば、力の差は明らかである。このことは、もちろん、講師にもあてはまる。

■研究、旅と遭遇

夏学期の私のゼミでは、主としてアメリカ人研究者による英語論文を扱った。私は、かなり緊張してゼミに臨んだのであるが、まもなく、学生の知識のレベルが私の予想していたものより、はるかに未熟であることを知った。私が高く見積もりすぎていたためである。そのためもあって、またおそらくは、私の稚拙なドイツ語能力も影響して、学生数は、当初より減っていった。

だが、少数の学生と議論を重ねたゼミ

は、私にとって、思いのほか楽しみの多いものになった。

学生の知識がまだ若いことを見て取った私は、関連する研究文献をそのつどあげながら、授業を進行していった。思いつくままにあげる文献は、英語またはドイツ語で読めるものに限られていたから、私は思いがけず、自分の知識の世界を反対側から覗くことになった。それは日本で学生に教えているときより、奥の浅いものになった気がした。

学生は、ときどき日本ではどうなのか、日本の学生はどうなのか、という質問を私に向けた。そのつど、私は外から日本を眺めるような気持ちで、テレビの中継カメラを操るように、日本の風景画像をいくつか思い浮かべて、答えた。確信のある答えもあったが、自信のないものもあった。また、私の考えはこうであっても、そうは思わない日本人もいるだろう、ということもあった。そういうことを、私はできるだけ学生に伝えようとした。

ヨーロッパ文化を研究対象とする私にとって、このような学生との対話の全体が、大いに興味深いものだった。学生がどういうことに興味をもち、どのように批判的な意見をいうのか興味をもった。また、私がつど、それをどのように受け止めるのか、ということも、私自身を発見する経験だった。印象に残っているシーンがふたつある。

■印象に残る授業風景

ひとつは、社会主義崩壊後のポーランドの工場研究をとりあげていたときのことである。世界資本主義を体現するアメ

リカ人経営者による経営＝販売戦略を、社会主義時代からの工場労働者が、どのように受け止めているかということについて、学生は、自分や自分の身の回りの人々の体験を重ね合わせながら、その論文を評価した。聞いてみると、彼女は、旧東ベルリン郊外の出身で、身近に農業経営をしている人もいるという。彼女は、壁崩壊後の農村地帯の人々が、西欧化、アメリカ化をいかにとらえているか、彼らのメンタリティについての彼女自身の観察を合わせて議論した。

もうひとつは、移民について議論しているときだった。ベルリンにはひじょうに多くの外国人が生活しているが、ドイツ社会は、決してそれを歓迎していない。日本ではどうか、という質問に対して、私は日本に外国人が少ないこと、外国人に対してはドイツよりも閉鎖的であると思うこと、その中に在日の人々の生活や、不法滞在者の存在があり、近年では日系ブラジル人労働者が増えていること、その政治的、経済的、歴史的背景を話した。学生は複雑な表情で聞いていたが、そのうち、自分が10歳のときにドイツに帰還した、移住者ドイツ人家族の一員である、ということ話を話出した。

移住者ドイツ人とは、歴史的なドイツの拡大政策によって東部地域に入植したドイツ人の子孫である。ドイツ政府は、外国人の権利をさまざまに制限する政策をとっているが、血統的な「ドイツ人」である、移住者ドイツ人には、たとえドイツ語をほとんど話すことができなくても、ドイツ国籍とドイツ人としてのさまざまな便宜が与えられた。

この学生も、10年ほど前、ドイツに来てからドイツ語を学んだという。そして、自分たちの恵まれた境遇に比べて、すでに20年以上もドイツに住んで働いているトルコ人の権利が、さまざまに制限されているのを見てきた。彼女は、それを少女のころから、公正でないと思ってきた、といった。

学生たちひとりひとりの、このような背景を、私は当初、まったく予想していなかった。ゼミで議論を重ねていくうちに、予期せずして、あらわれでてきたのである。私にとって、それは、たいへん興味深いものであった。今でも、ときどき、そのときの風景を思い出している。

私のゼミの学生は、数人であったが、その中に、西ドイツ出身で会社での労働経験をもつ学生と、旧東ドイツ出身の学生、さらに東欧から帰還した移住ドイツ人がいた。そのなかの一人は、アイルランドの少数語集団の調査もしているといっていた。彼らの経験は、彼らの議論に投影していた。そして私自身もまた、オーストリアの農村やベルリンの調査で経験したこと、日本での経験をまじえながら、彼らと議論した。

ゼミを振り返ってみて私が思うのは、私一人の経験だけが、異文化だったわけではない、ということである。考えてみれば、大学は、また大学が所在する都市は、そういう多様な文化が集うところである。それにしても、この発見は重要である。換言すると、それは、都市の文化が動いていて、それが異質なものを絶えず組み込んで新しく編成されている、ということのひとつの表現であった。



ゼミの学生たちは、文化研究者の卵である。と同時に、彼らひとりひとりが、都市の文化を同時進行形で再生産している途上にあつた。そして、私もまた、そのひとりであつたといえよう。

「旅する文化」という考えは、近年のアカデミズムの世界でも検討すべき問題領域として、浮上りつつある。旅をする人とともに、文化も旅をしている。そして、そのような文化を研究する研究者もまた旅をしている。

そういう人たちが都市で遭遇して、新しい都市の文化が編成されている。このことは、ベルリンに限ったことではあるまい。

私が講義をしている京都の大学のことを考えてみても、受講生の出身地は、日本全国にわたるし、留学生も数人含まれている。彼らに対して、これまで私は、知識を伝達していると考えていたが、むしろ、彼らとともに新しい文化をつくりつつある、と考えることも可能だろう。

□参考文献

クリフォード、ジェイムズ：『ルーツ—20世紀後期の旅と翻訳』月曜社、2002年